

子供を見取る



6月19日（水）の研修に先立ち、「子供を見取る」ことに関わっての最近の出来事を紹介したいと思います。

1 子供を見る教師の姿勢

6月14日（金）1・2校時、荒地から苦労して開墾した藍畑にいよいよ種から育てた苗を植えに5の2の子供達と向かいました。ですが広い畑にマルチを張る作業が思いの外進まず、慌てた私は大声で子供に指示を飛ばして、何とか苗を植え終わりました。ですが、その日の夕方畑に苗の様子を見に行くと、植えた苗のおよそ半分が強い日差しに焼かれ既に枯れてしまっていたのです。わずかに生き残った苗の根元ひとつひとつに丁寧に土をかけ水をやりながら、今更ながら祈るような思いで一人苗を植え直しました。そして、今自分がやっていることこそが今日の授業で子供とやりたいことだったんだと、子供の手元をちゃんと見ることでできていなかった自分を反省しました。活動の中でとかく教師は、子供を見ることより全体を眺めて活動を進めることに集中してしまいがちです。ですが、そのような教師の姿勢では決して見ることでできない子供の手元のわずかな動きや小さな呟きの中にこそ、本当に大切なことがあるのではないのでしょうか。



【写真】Aが書いた220円

2 子供を見取ること 子供の事実から授業を始めること

大畑先生にお聞きした話を紹介します。湧水を使った料理を作り始めた3年生。3年の先生方の構想では、調理の活動から、カフェのようなお店の活動へと展開していくことを願いつつ、その展開が子供たちから生まれていくにはどうすればよいかと検討されていました。そしてそのための「学習材」になり得る、子供が書いた1枚の紙を大畑先生に見せていただきました。（【写真】）この紙はテーブルに並べた調理のいわば作品カードです。ですが、この紙を書いた子はお店のメニュー表に見立てるようにして「220円」と書いていたのです。この子の中ではすでにお店の活動が広がっているのではないかと、そしてこの子の思いや願いから、販売活動への展開を生むことができるのではないかと、『Aが書いた220円』にお店の活動への展開を生む「学習材」としての可能性を感じました。先生方ならどんな風にこの「学習材」（『Aが書いた220円』）を出しますか？子供のふり返りや記録等を見ながら、そこから次の授業の糸口を探す、ここに子供を見取ること、子供の事実から授業を始めるということの一つの具体があるように思いました。